

> 地域とのかかわり

最先端の医療を提供～医学部附属病院～

山形大学医学部附属病院での高度医療提供のコンセプトは、患者の治療のために医療の様々な部門が協力する体制、診療科の境界を越えて協力する体制を整備し、運用し実績を上げていることです。これは循環器病センター、呼吸器病センター、周産母子センター、脳卒中センターとして病棟改修後の新病棟で機能しています。2005年に設立された医学部がんセンターは、がん研究、臨床及び教育のセンターとして発展、機能しています。がん患者登録センターでは、院内がん登録者数が着実に伸び、それらの診療情報を基に、学内外でのがん診療、研究の進展に寄与しています。また、がん治療の専門家達の意見を集約し最適な医療を提案する山形大学方式CTB（キャントリートメントボード）も、検討症例数延べ1,847例・参加者延べ人数20,556名となり（2011年12月末現在）、集学的治療実践のためのシステムとして確実に進歩しています。がん緩和ケアチームは、全国の緩和チームの中から「第4回オレンジサークルアワード2011」の優秀賞に選ばれました。

山形県民に高度医療の提供をするために、平成17年度から開始した医学部附属病院再整備計画は、平成23年5月をもって病棟部分の改修が終了し、現在、中央診療棟の改修を進めています。急性期医療及び高度医療の推進（手術部、救急部、ICU・HCU等の充実）、診療スペースの改善、がんセンターを中心としたCTB、外来がん化学療法室の整備拡充、最新鋭のがん関連医療機器であるリニアック（IMRT）、PET/CTの整備等を行いました。平成24年5月には、手術支援ロボット「ダビンチ・サーボカルシステム」を導入しトレーニングプログラムを開始、7月には第1例目の手術を施行しました。今後、より安全かつ高度な手術の実施、県内医療機関との連携を視野に入れた運用を目指しています。



ダビンチシステムを操作する術者

ダビンチシステムによる手術の様子





附属病院外観。手前は外来・中央診療棟改修に伴う仮設の正面玄関

地域医療を支えるために

山形大学医学部は、地域医療の向上と医師の偏在等今日的な課題の改善のために地域と連携した取組を進めております。その一つとして、平成14年8月に、医学部、県内外の関連病院、県健康福祉部及び県医師会をはじめとする医療関係団体から構成される「蔵王協議会」（嘉山孝正会長）を設立しました。同協議会では、医師不足への対応（医師の適正配置）、医療資源の有効活用など今日の医療を取り巻く社会的課題について、大学、行政、病院、団体等の垣根を超えた取組を推進しています。地域医療の崩壊が危惧される中、多くの医療関係者が参加し、協議形式で地域医療の改善と向上に取り組むこのシステムは、全国唯一の医療提供体制のモデルとして注目されています。

また、山形県内のみならず、東北地域全体を視野に入れた医療ネットワークを構築しています。東北がんネットワークは、がん医療に関する取組を、東北という広い枠組みでとらえ、より効率的ながん医療均てん化や情報共有、医療人の育成を目指して平成20年8月に設立されました。同ネットワークでは、がん登録、地域連携パス、がん患者相談室、緩和医療、化学療法、放射線治療の各専門委員会において、東北における合理的ながん医療の実現を目指しています。

東北地域は粒子線がん治療の空白地帯となっているため、平成24年4月に結城プランに基づき、学長直属の組織として「重粒子線がん治療施設設置準備室」（嘉山孝正室長）を設置しました。さらに、6月には同施設の設置計画に関し総合的な観点から意見交換を行う「山形大学重粒子線がん治療施設設置推進協議会」を設立し、座長である結城学長を中心として同施設の設置推進について検討しているところです。

以上のように、山形大学では今後も地域一体となった取組を続け、地域医療の向上に尽力していきます。

附属病院患者数推移





小白川キャンパス 第1回ホームカミングデイ開催

山形大学の卒業生の皆様に大学の近況に触れていただくとともに、旧友、恩師との旧交を温めていただきたい、また、在学生にはOB・OGと交流することで「人間力」を学び取ってもらうとともに、就職、キャリアデザインに役立ててもらうことを目的とし、平成23年10月に小白川キャンパスでは初となるホームカミングデイを開催しました。

午前中は、結城学長の挨拶に続き、学生による大学歌、学生歌の演奏があった後、高畠ワイン(株)取締役相談役の奥山徹也氏による基調講演が行われました。

午後からは、「OB・OGフォーラム」を開催し、パネルディスカッションや懇談会を通して、OB・OGの方々と在学生が活発に意見を交換しました。また、小白川キャンパス内各学部及び附属図書館・博物館などでは、パネル展や公開講座などを通して、各学部の特徴をアピールする催しも行われました。

小白川キャンパスホームカミングデイは、本年も、平成24年10月に開催される山形大学祭「八峰祭」に合わせて、小白川キャンパス内の3学部にて開催されます。



日東ベスト(株)と農学部との産学連携により生まれたラ・フランスの基礎化粧品「フランヌ ブランシュ」。

産学連携の取組

山形県内有数の食品メーカー、日東ベスト(株)から平成24年2月に発売された新商品、それはラ・フランスから作った…化粧品でした。

この意外ともいえる商品開発のきっかけになったのは、平成13年に、当時山形駅前に設置していた山形大学サテライトにてスタートした、地元の食品関連会社との勉強会でした。その勉強会のテーマの一つとして、山形県を代表する農作物であるラ・フランスが取り上げられることになり、そこから、参加していた日東ベスト(株)と農学部の共同研究がスタート、研究の結果、ラ・フランスの枝に美白効果で知られているアルブチンが豊富に含まれていることが分かり、10年の研究・開発期間を経て製品化されることになりました。ラ・フランスの枝は栽培の過程で剪定、廃棄処分されていましたが、それが有効活用されることから、ラ・フランスの生産農家からも歓迎されています。

上記の成果が示すように、山形大学は産学連携の取組に力を入れています。理学部の栗原教授は、山形大学名義で特許出願した「プリンテッド・エレクトロニクス」に関する先端技術について、参加企業18社と共有し、製品開発や実用化の迅速化を狙った画期的な仕組み「ナノメタルスクール」を発足させました。

また、山形大学が研究をリードしている有機EL技術を活用し、省エネルギーな植物工場の実用化を目指すベンチャー企業「ナチュラルプロセスファクトリー(株)」が発足しました。

ナチュラルプロセスファクトリー(株)は、植物の栽培に最適な波長の光が出せる有機EL照明や、流体力学的に計算し省エネ化された工場の設計開発から、香りや酵素などの成分を損なわずに食品を常温で乾燥させることが出来る常温乾燥機及び常温乾燥技術を用いた食品の製造販売を目指しており、実現すれば電気代を節減することで生産野菜の低価格化、乾燥地や積雪地など、野菜栽培に適さない土地での活用などが期待されます。

